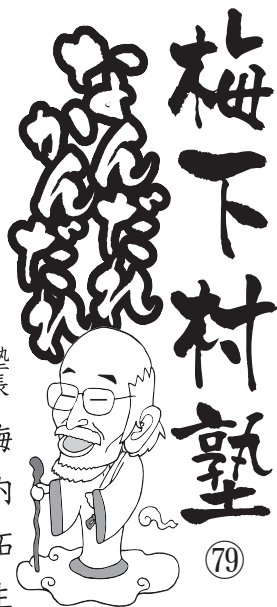


# 「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

## 気仙地方文化と21世紀文明(1)

(地球の気候変動と地殻変動)

2月25日に発生した震度5を越える地震が栃木県の内陸の日光市を襲ったニュースが26日の朝のテレビに放映されていた。青森県の酸ヶ湯温泉には6層にも達しようとしている積雪のニュースが放映されている。上空には大寒気団がすすわっているとのニュースであった。

60年以上前の子供の頃の気仙地方の冬も寒かったことを思いだした。科学技術が進み、気象衛星からの情報で、天気予報は詳しく報道されるようになったが、気候変動を地球文明との関係で捉える考え方もいろいろ変化している。イギリスではじまった産業革命以来、欧米を始めとして、世界は20世紀まで、産業生産と消費のライフスタイルの中か

ら、大量の熱を大気に放出してきた。

地球温暖化はこれが原因であるという考えがある一方、この温暖化を数百年スケールで

はなく、数千年スケールで考えると、地球は寒冷に向かっているのではないかという見方もある。コンピュータを使った現代科学でさえも、今後の気候変動と地殻変動の予測は難しいものがある。

3・11東日本大震災を経験して、大震災時の原子力エネルギーのコントロールが困難であるという新しい課題も突きつけられている。

(歴史 伝統文化、芸術)

梅下村塾では、地域で詠まれた短歌、俳句、川柳を地域の歴史と文化につなげて、地域から生まれて来る世界へのメッセージを論じてきている。宮沢賢治の世界にはまさに東北の歴史、伝統文化、

芸術がいりまじっている。

法華経の熱心な信者であったといわれている宮沢賢治には縄文的世界と仏教的世界がまじっているものが感じられる。「農民芸術概論綱要」にはこの思いが強く伝わっている。「風と行き来し、雲からエネルギーをとれ」、まさにこの言葉がそののひとつである。

2012年に開催された、「森と水と命の惑星」国際会議にパネリストとして出席した、米国在住の鶴浦真紗子氏が提示した絵画「Colors of Life」のうちの彩(いろ) project(未来への夢ウォール)、釜石で多くの遺体を心をこめて送って、石井光太氏のルポタージュ「遺体」に掲載され、映画化された。

盛小学校、中学校の同級の千葉淳氏、前住田町の町長をした菅野剛氏、気仙の文化と中国の文化の橋渡しをしている気仙アレカットの温秀輝氏ら、これらパネリストの言葉の奥には世界につながる気仙の(歴史 伝統文化、芸術)の心が感じ取られた。

パネリストとして参加した、京都の大徳寺の瑞峯院の住職の前田

昌道氏も瓦礫となった海の近傍を眺め、同時に気仙地方を取り巻いている山々の気韻を感じ取って、これが宮沢賢治の世界なのですねといっていた。地元

の気仙地方では当たり前と思っっている(歴史 伝統文化、芸術)の中に、国内外の人々の心に響くものがあり、それを掘り出して世界に発信することを目指さねばならないと思っ

ている。

(「梅下村塾」と他地域新聞とのつながり) 「梅下村塾」の連載も80回に届こうとしている。この連載に注目にして、西多摩新聞社が「にしたま文華塾」の連載を始めている。青梅市を中心とする西多摩地方は羽村市、福生市、あきる野市、など4市4町村から成り立っております。

明治憲法が公布される10年も前にこの地方では、地元有志が集まって五日市憲法草案をしたためて、明治政府に提案している。まさに草の根の憲法草案である。しかし明治政府は、これにまともに

は応じなかった。この憲法草案が昭和になってから西多摩地方の有識者の土蔵から発見された。そこには、自由

と規律を尊重する地方自治の姿が描かれている。

「にしたま文化塾」は①地域の歴史文化、②60年以上の歴史を持つ学習塾「琴河原学院」の小学生の「5・7・5」から見た地域文化価値意識教育③老人医療病院での心のケアへのボランティア活動研究、の三領域から構成されている。地域新聞と地域文化価値教育研究との連携という新しい「つながり」が展開されている。

「少子高齢化、過疎化などの対策としての地域文化価値」教育活動の展開は地域の活性化に大いに役立つものと思っ

ている。

(東海新報記事から) 2月23日(土)の第3面に「新しい公共」を考える 元気なまちづくりフォーラム 北川元知事が基調講演 NPOによる事例発表も大船渡市」が掲載されている。

北川氏は「地域課題の解決に向けて、NPOや自治会等のこれからの役割」と題した講演の中で、中央集権から地方分権への体制転換を図る法整備の流れをたどりながら、地方自治の局面変化を紹

介。

住民が社会を構成する地方分権に向けて、「このまま中央集権でいけば、東京の一人勝ち。法律だけではなく、自分たちのまちは自分たちがつくるということの本質的に考えて行かねばならない」などと指摘した。このような掲載記事であった。

要は、部落の集まりでの話し合いが、部落を越えて町、そして市全体を視野に入れた話し合いが出来るようにすることなのである。これには、住民の一人一人が常日頃から隣近所だけでなく、市全体のことを考えることが不可欠であり、市議員たちと堂々と議論をするまでに、自分で情報分析をして、自分を鍛えあげることである。

公共とは自分と他人との違いと共通するところをお互いに整理して、そこから新しくお互いが納得する世界を見出し、その実現に協力することである。東海新報の紙上討論会も「新しい公共を考える」ということを実現するための一つの方法であると思っ